

斎藤宇一郎と白瀬矗

先覚部門 平田 有宏

1 斎藤宇一郎と白瀬矗

(1) 斎藤宇一郎の人物像

- ・「人格者として崇敬された」
- ・「正真正銘の人格者」

(2) 斎藤宇一郎の衆議院議員総選挙における当落状況

- ・8期連続当選（以下一部抜粋、いずれも秋田県選挙区）

年代	回	区	当落	所属政党
明治35年（1902）	第7回	郡部区	2位当選（初）	憲政本党
大正6年（1917）	第13回	郡部区	3位当選（7回目）	憲政会

(3) 白瀬矗の衆議院議員総選挙出馬計画

- ・2度とも出馬せず

明治35年（1902）	第7回	前年11月、須藤善一郎代議士（本荘市）に地盤の譲渡を要求（書簡で要求か）→結局出馬せず
大正6年（1917）	第13回	2月、大日本選挙改正会推薦での出馬を表明（秋田魁新報5日付）→のち断念

2 白瀬矗宛斎藤宇一郎書簡・はがき（白瀬南極探検隊記念館蔵）

(1) 書簡（明治35年（1902年）8月）

- ・第7回衆院選当選（初当選）の祝詞に対する返信

☆白瀬が宇一郎の衆議院議員当選の祝詞を出した。

(2) はがき（明治38年（1905年）8月）

- ・日露戦争に従軍中の白瀬に対する陣中見舞いか

(3) 書簡（明治39年（1906年）6月）

- ・日露戦争後の凱旋に対する慰問（右手と胸を負傷した白瀬を気遣っている）

☆宇一郎は、遅くとも(2)はがき（明治38年）を投函するまでの間に、白瀬が千島の警備と開拓の政府事業化実現のために衆議院議員を目指していたことと同選挙への出馬を断念したことを知った可能性が高い。

(4) 書簡（明治43年（1910年）5月）

- ・白瀬の南極探検資金確保に対する助言（報知新聞等へ募金広告を出すことを提案）

☆自らも大隈とともに南極探検を支援するという意思の表れと捉えることができる。

(5) 書簡（大正6年（1917年）2月）

- ・第13回衆院選へ憲政会からの立候補を検討している白瀬に対する助言

- ・宇一郎が衆議院議員への立候補をいったんは辞退していたことを裏付ける内容

☆白瀬が大日本選挙改正会から推薦を受けたにもかかわらず、憲政会からの立候補も視野に入れていた。

3 まとめ

☆宇一郎は、明治35年の衆議院議員総選挙において、白瀬は宇一郎が立候補したことにより代議士になれなかったことを終生忘れなかったと考えられる。それは白瀬が出征しているときははがきで励まし、帰還後は書簡でけがを見舞ったり、南極探検の資金確保に際しては大隈とともに支援しようとしたりしていたことから窺える。なお、大正6年の書簡からは、白瀬を応援しつつも同時に厳しい現実も伝えていることから、宇一郎の誠実な人柄がよく分かる。